



ハンド・イン・ハンド 2008—2009年度年間報告

イラ・ケレン (Ira Keren) - HIH 国際事務局運営員



凧あげに興づるハンド・イン・ハンド・エルサレム校の子どもたち (HIH 国際事務局提供)

前進の年2009年

ハンド・イン・ハンドにとって、2009年度は前進の年だったといえる。それは、基本理念であるバイリンガル・多文化、そしてアラブ・ユダヤの相互理解と相互尊重を中心とする学校教育がさらに組織化されたからである。本年度の4校合わせた生徒

数は 882 人、教師数 138 人、教室数 38。また高校 2 年生までのクラスも出来た。11 年前、49 人の子どもたちと一緒にエルサレムとガリラヤにおいて、それぞれ 1 クラスで始められたことを思えば、すばらしい前進だ（下表参照）。

2009年度 ハンド・イン・ハンド校

	エルサレム校	ガリラヤ校	ワディアラ校	ベエルシェバ校	総計
教室数 (昨年度)	19 (18)	9 (9)	7 (8)	3 (2)	38 (39)
生徒数 (昨年度)	494 (456)	171 (191)	151 (189)	66 (44)	882 (880)
アラブ人 (昨年度)	284 (201)	122 (113)	102 (125)	34 (23)	542 (462)
ユダヤ人 (昨年度)	171 (162)	49 (78)	49 (120)	32 (21)	301 (381)
その他 (昨年度)	39 (37)				39 (37)
教師数 常勤/非常勤	68	32	28	8	138

学校に携わっている生徒、教師、運営委員会、親、賛同者総計 6000人

組織の強化:本年度は 5 人の新しい校長を迎え、強力なアラブ・ユダヤ 2 人校長制度が確立した。その結果、教育指導がさらに充実し運営の安定が得られた。また各校長と HIH 指導部が月 1 回の合同会議を開き、運営上の改善や各種問題の処理、助言などが話し合われる。この会合は今まで以上に組織の強化につながっている。

生徒の学力向上:数学、科学、読書、英語などの通常教科の向上も重要な改善課題だった。実際、本年度は各校長から多くの生徒の学力が向上したという報告があった。エルサレム校では、米国からの学生ボランティアによる英語サマースクールを行い、大盛況だった。来年は HIH 生徒以外からも募り、多くの子どもたちにハンド・イン・ハンド教育を知ってもらおう予定だ。

幼稚園の学習改善:幼児教育の専門家、アジザ・マナが HIH 幼児部全体の監督として就任し、新たなアラビア語教育のカリキュラムを作った。ユダヤ人児童たちのアラビア語基礎能力の遅れを改善するため、教室内でアラビア語をたくさん使うようにした。幼児期にきちんとバイリンガル環境を作れば、その後の学校生活、ひいては人生で 2 言語をきちんと使えるようになるという主旨に基づく。

イスラエル政府の後援: 教育省内にイスラエルにおけるアラブ・ユダヤ人平等社会の構築強化のために設けられた委員会の報告書として、「ユダヤ社会とアラブ社会間の共同生活」が発行された。この報告書ではハンド・イン・ハンドを引用して、このようなバイリンガル・多文化主義の学校を政府主導で創っていくことを強く主張している。

またすべての学校教育にハンド・イン・ハンドが進めている「民主主義、平等、人権、他者の受容、他宗教の理解と尊重、ユダヤ・アラブ文化の相互理解」をカリキュラムとして導入することを推薦している。

4校の現状

エルサレム校

08年14人の生徒が高校1年に進級し2010年には高校3年生になる。これで幼稚園から高校まで一貫した教育システムが確立することになる。リオール・アビマン新校長のもと、教育者は初めての HIH 高等部が成功するよう全力を捧げている。また新しいプロジェクトとして、小学部から高等部まで民主主義について学ぶ強化週間を設けた。生徒評議会を組織し、校内に自由な気風を作った。そのほか「アラビア語の日」「身体教育週間」「ユダヤ・アラブ作家訪問」「ガザやスデロットへの食料、毛布、衣服の収集と寄付」「近隣コミュニティーへの奉仕活動」等を行った。

ガリラヤ校

アレフ・ベイト種苗会社との協力プロジェクトとして、同社の研究所を使って、生徒たちによる「温室の建設」「種まきの方法」「食料の作り方」「作物育成のモニタリング」を科学の授業として行った。企業の協力で現実社会の一部を学ぶことができた。また中学部ではキブツ・ロハメイ・ハゲタオットの人権教育センターと協力して、08年11月より地域奉仕活動に参加し始めた。生徒たちはまず、周辺のアラブ・ユダヤ村落で、身体障害者や老人など支援が必要な人々の生活をサポートしている協力団体のワークショップに参加し、その後、実際に地域奉仕活動始める。これによって子どもたちは理論と実践を通じ地域社会を学んでいく。

ワディアラ校

ガリラヤ校とともにユダヤ人生徒の減少が目立つ。ハンド・イン・ハンドが興味深い教育システムであることをさらにアピールする必要がある。ガリラヤ地区のシャアブ、サフニン、クファル・カラの新町長と会合を持ち、その方法を話し合った。またこれらの地域では子どもたちの通学圏が広範囲に亘っているため、親の送り迎えの負担がかなり大きい。スクールバスなどがあれば、問題は改善されると思われるが、資金工面の問題がある。

ベエルシェバ校

イスラエル教育省とベエルシェバ市役所の許可を受け、09年9月より小学1年がスタート、25人の児童がハンド・イン・ハンド小学部に入学した。

今後の課題

共存の理念の強化：ハンド・イン・ハンドの目標は、学校活動を通して広くイスラエル社会や国際社会に影響を与えることだ。出口の見えない民族紛争に多くの人々が失望し、平和への長い道のりに諦めを感じている。そんな時こそハンド・イン・ハンドが、ユダヤ・アラブ共存の可能性を社会に提示することが重要になってくる。それは両民族の子どもたちによる日常活動をイスラエル内外の人々や団体に紹介していくことだ。本年度、多くの国際会議や社会に HIH 関係者や生徒たちが招待され、活動報告を行った。そのほか多くの各国政府高官や報道関係者が学校を訪れた。

新規ハンド・イン・ハンド校開校の要望：毎年多くの両親グループからハンド・イン・ハンド開校の要望がある。これは大変喜ばしいことである。しかし、同時に資金面の問題もある。本年度はテルアビブ地区、ハイファ地区、ラムレ・ロッド地区のグループと協力契約を結んだ。またハンド・イン・ハンド創設者の一人で現理事長のアミン・ハラフが、ハイファ地区の指導層と協力して、ハンド・イン・ハンド・ハイファ校開校の準備を始めた。

経済危機の影響がハンド・イン・ハンドにも

世界的な経済危機は寄付金の減少という形でハンド・イン・ハンドにも深刻な影響を与えた。私たちの運営資金は年間 200 万ドルで内訳は 1/3 が教育省の予算、1/3 は学費として徴収、1/3 が寄付金(個人、各種団体)で賄われている。多くの NGO と同様にハンドインハンドも資金繰りが難しく、予算の見直しや、新たな資金源探しも行っている。経済危機以前からも、生徒数の増加や新規開校等による運営資金の増加が課題になっている。

HIH も深刻な経済的打撃を受けたが、世界中の支援者の協力により週 5 日、年間 10 カ月の教育活動が続けられている。私たちをサポートして下さる皆様に日頃から感謝すると共に、皆様がイスラエルを含めた世界平和推進運動の一翼を担われていることを、誇りとしていただきたいと思います。(訳:中島ヤスミン)

イスラエル南部での平和への挑戦、

バイリンガル教育会議



ローレン・ジョウゼフ (Lauren Joseph) ハガール協会会員

2009年11月23日、ネゲブ地域の地方首都ベエルシェバ市でバイリンガル教育会議が開催された。この会議は us 北部ユダヤ人組織連合、ユダヤ・アラブ平和模索部が呼びかけたものでハンド・イン・ハンド校に属している学校として、アキバ・レボヴィチ医師とサファー・アボ・ラビア女史が講師として招待された。アキバ医師はハガール・ベエルシェバ・ハンド・イン・ハンド校の創設メンバーの一人で、ハガール協会の議長である。サファー女史は母親であり、ネゲブ・マンデル・センターのメンバーで、イスラエル南部の平和教育を指導している。

ネゲブ地域の特徴

ネゲブ地域はユダヤ人とアラブ人が創り出す特別なコミュニティである。アラブ人に属するベドウィンが26%、ソ連からの移民が20%を占めている。ネゲブはいろいろな文化の交差点である。ユダヤ人でアラブ諸国から移住してきたミズラヒーと呼ば

れる人々、ヨーロッパから移住してきたユダヤ人でアシケナジーと呼ばれる人々と、ロシアからのユダヤ人移民、アラブ・ベドウインのモザイクである。宗教的には、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教などのモザイクだ。ネゲブには約17万6千人のアラブ・ベドウイン人が住んでいる。ベエルシェバはネゲブ地域の地方首都で、21万のユダヤ人が生活している。

ベエルシェバ市内にはアラブ人の子どものための学校は存在しない。親たちは、子どもをベエルシェバ市内のユダヤ人学校に入学させるか、集落近辺のアラブ人学校、あるいはベドウイン人の学校にスクール・バスで送るか、どれかを選択しなければならない。ユダヤ人学校では、子どもたちはヘブライ語でシオニズム思想に基づいて、イスラエルの歴史やユダヤ人の祝祭日を学ぶ。アラブ・ベドウイン文化学習はここではほとんどない。

サファー女史のケースは

サファー女史はベエルシェバ生まれ、父親は医師、母親はイスラエル北部出身の幼稚園退職教師である。両親はサファーと親戚の子どもたちを5年生までテル・シェバにあるアラブ校に送った。親たちは、子ども時代は、民族の文化と文化遺産を身につけることが重要と信じていたからである。しかしサファの両親が、ベドウイン学校の水準がユダヤ人学校より低いと知った時、勇敢な決断を下した。サファーをベエルシェバにあるユダヤ人学校に転校させたのである。サファーはユダヤ人が初めて出会ったアラブ人の子どもになった。後でもう4人の子どもが転入してきた。ユダヤ人とアラブ人生徒の比は1000：5であった。学校ではアラブ人の子どもは目につかず、“見知らぬ人”的存在だった。

若い時代のこの経験が彼女の人生を変えた。ナサムという名の4歳女兒の母親として、ユダヤ学校に入れようか、アラブ学校に入れようか悩む必要がなくなった。ハガール協会のおかげで選択の自由があったのである。ユダヤ人とアラブ人の子どもが共に学ぶバイリンガルで多文化を容認する学校が開校したのだ。ナサムはこの学校で、アラブ・ベドウインとしてのアイデンティティを自覚するだろう。彼女は誇りをもってアラブ民族の歴史、文化、イスラム教、そしてアラビア語を学べるのである。同時に彼女は、ヘブライ語やユダヤ文化についても学べる。さらに、宗教や文化の違いを乗り越えて、教科より重要な、相互尊敬、相互認識の態度を身に付けるだろう。

アキバ医師の講演要旨

アキバ医師はネゲブ地域に長い間住む、ハガール・ベエルシェバ・ハンド・イン・ハンド校の創設者の一人である。彼は2006年に発足したハガール協会議長として開校運動の主動力になった。彼はハガール協会の歴史について、以下のような講演を行った。

この協会はネゲブ地域でアラブ人とユダヤ人の対立に憂慮している親たちのグループで構成されている。ハガール協会員はベエルシェバ市庁、イスラエル文部省に働きかけ、イスラエル学校制度の一環としてバイリンガル校を開校した。今のところハガー

ル・ベエルシェバ・ハンド・イン・ハンド校はネゲブでこの種の唯一の学校である。

言語は、社会的、文化的、知的でかつ感情を包含するものとして、複雑な要素を持つ。したがって、子どもたちが学校で2カ国語を話すことは、相互の意志疎通の手段としてはそう簡単ではない。しかし、やがてはアラブとユダヤの子どもたち同士が、民族のアイデンティティーを確認するだけでなく、親密な協調関係を確立し相互尊敬するようになる。幼少の頃からこれらの関係がアラブ・ユダヤの子どもの中で育成され、その後も継続されるのだ。

アキバ医師の2人の子どもはハガール校に入学している。聴衆から「何故ハガール校を選択したのか」という質問が出た。彼の回答は、「あたりまえの社会では、この種の学校は必要ではない。しかし、現在のイスラエル・パレチナ社会ではこうしたイニシアチブが求められる。現在のように、お互いに隣人として生活していながら分離、無知、疎外が存在する事実は無視できない。アラブ人とユダヤ人が、ネゲブ地域を共有財産とみなさなければならぬ運命なら、相手があたかも存在しないかのように無視して生活するのではなく、共存する方法を見つけるべきなのだ」と結んだ。（**翻訳と要約：松村**）

現場からの報告

ユダヤ・アラブ共学共存活動

ハヨベール中学校教師 山崎エステル
ゴーシュ・ハアイン町（ユダヤ側）

イスラエルの新学期は、9月に始まります。共学共存活動は、毎年新学期開始と同時に、イスラエル各地域でユダヤとアラブの両方から、相手となる学校を選択する活動から始めます。

私のハヨベール中学校は、ゴーシュ・ハアインというユダヤの町にあります。一方、スワード教師のイーベン・シナ中学校は隣のアラブの町クファル・カセムにあります。スワード氏は、昨年イスラエル教育省主催の、共学共存教育講習会で知り合ったアラブ側の教師です。私とスワード教師は、昨年につき、協力して共学共存活動をすることを即座に合意しました。

毎年、活動スタートの時期には、政府の教育省から派遣されてくる共学共存の教育指導員も参加して、その年の計画を立てます。活動目標には、政治問題の研究討論などを含んだ内容の重いプログラムもあります。しかし私たちは、子供たちの興味を引き出すために今年は「両民族に伝承されてきた祭り行事と風習を共に学ぶ」というタイトルで活動することを提案しました。指導員の賛同を得て、私たち現場の教師が計

画を作成しました。

この計画は各民族間に受け継がれた家庭での誕生祝い、青春時代の行事、結婚等の民族風習などを学ぶという比較的自然的な内容になりました。そして生徒たちも受け入れ易いものだと思います。

今年は、すでに1回目のユダヤ・アラブ合同活動を行いました。ユダヤのハヌカ祭とイスラム教のイーデル・アドファー祭(アラビア語で犠牲祭の意味)を題材にお互いを知る活動です。これらのお祭りは、両民族に約2000年以前から現在に至るまで、正確に受け継がれています。



ゴーシュ・ハイン中とイーベン・シナ中学校の子どもたちの記念撮影: 筆者提供

ハヌカ祭は燭台のロウソクに火をともし、コマをまわして祝います。この祭は、昔のユダヤの歴史物語に基づきユダヤの神殿で「一日分しか火が灯せないと思われた燭台の火が、8日間消えずに灯った」という奇跡を祝います。

一方、イスラム教のイーデル・アドファー祭は、旧約聖書の物語で、神がアブラハムの信仰の深さを試すために、息子イシュマエルを生贄にせよと命じた伝説に基づいています。父親であるアブラハムは最後の瞬間まで神を信じて、子を生贄にしようとしていました。もちろん、この話は最後の瞬間に神のみ声が降り、アブラハムは息子の代わりに近くにいた羊を生贄にして、神の信頼を受けたのです。この物語を伝承するアラブのイスラム教の家族では、現在でも羊の生贄を準備してお祭りを祝っています。

実はこの物語には、不思議な伝承事実があります。この生贄の対象になったのはユダヤ教とキリスト教では、アブラハムの息子イツハクと伝えられています。つまり、ユダヤ人の先祖イツハクとアラブ人の先祖、イシュマエルは、なんと異母兄弟なのです。この歴史的事実から考えてもユダヤとアラブ両民族は、すでに共存の可能性があるのではないかと思えます。

今年の1回目のユダヤ・アラブ合同クラブ活動では、ハヌカ祭とイーデル・アドファー祭に好んで食べる伝統的なお菓子を食べました。ユダヤ側ではスフガニヨットと呼ばれるドーナツ、アラブ側ではカキール・イッドと呼ばれる焼いたお菓子でした。もちろん、コーラやジュースも仲良く飲みました。今年の新入生たちは昨年よりも社交的で、最初の合同活動から和気あいあいと賑やかに話し合っていました。

今後の予定として、ユダヤ・アラブの保護者にも参加して頂く「共学共存の夕べ」、ユダヤ・アラブ合同の旅行や、地域を拡大しより多くの中学生が参加できる1日イベントも予定しています。{翻訳・文責 山崎智昭}

共学共存推進日伊支援会・09年のまとめと未来への夢

山崎 智昭

私達の共学共存推進支援活動は、一昨年秋、イスラエル国法務省に非営利組織として公式に登録する行動から始まりました。そして昨年2月、正式に法務省より認可され、活動を始めました。従来はハンド・イン・ハンドの共学共存教育運動のみを支持していましたが、機関誌名を「ケレン・ハオール」という名称に変更することにより、更に広範囲な共学共存教育活動を行い、その姿を読者にお届けできる環境を整えました。

昨年の活動は次の通りです。

1. 妻のエステルが教鞭をとっているゴーシュ・ハアイン地区のユダヤ・アラブ共学共存クラブでの現場活動報告を掲載し、具体的な様子をお届けできたこと。
2. ハンド・イン・ハンド校訪問記や共学共存活動をしている既存の他グループ訪問記なども幅広く掲載できたこと。
3. 関連機関との連携を模索しながら、本年度の具体的活動目標を選定する準備をしてきたこと。

さて私達の機関紙は、お陰様で今回、5号を発行するまでに到りました。この時点で私達は、さらに具体的な「夢目標」を設定しようと考え、昨年のまとめと今年の展望を話し合いました。そこで生まれた「夢のような」計画は、日本のお仲間からの応援とご理解を頂いて、「ケレン・ハオール」独自の共学共存学校が将来建設可能になるような方向で支援活動を進めていこうという大きなものです。

すでにイスラエル国内には、アメリカやヨーロッパ諸国からの支援金による共学共存の複数の学校施設があります。それらの学校は共学共存の教育目標をユニークな教育原理と方法で実施しています。私たちは現存する共学共存学校と連携を保ちながら、独自の学校建設を夢見ているのです。

それは、ユダヤとアラブの共学共存という考え方は、「まだまだ過渡期で今後も多方面からの教育アイデアの導入が不可欠だ」と私が感じているからです。各国からの教育原理導入は、究極的には優れた共学共存の方向性を明確にすると思います。その一角に日本独自の教育原理が導入できる学校建設が進めば、さらに大きなステップに繋がると思うのです。

まず、現時点で私が考えるのは、この我々の奉仕活動は多くの人々の協力と理解、仲間意識がなければ成功しないだろうということです。この活動は一人ひとりが草の根で辛抱強く運動を継続する必要があると思います。

もちろん、いきなり学校ができるはずはありません。ユダヤ・アラブ共同の小さな

サークル活動を幾つも開設して賛同者の参加を呼び込む活動から始めなければなりません。スポーツ分野ではサッカークラブ、音楽分野では楽器演奏や合唱クラブ、ダンスでは民族ダンスクラブ等々、アイデアはいっぱい出てきそうです。それらの小さなクラブ活動との連携を草の根運動として継続維持し続け、学校建設の条件を整えていきたいと思ひます。イスラエル国内では、これらの合同クラブ活動は幅広く人気があります。可能であればユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会からこれらのクラブに援助資金提供などを行い、関係強化をしていきたいと思ひます。

女性パワーも縁の下の力持ちとして、基盤組織に参加して頂けるよう考えたいのです。民族料理教室とかフォークダンス親睦クラブとか民族音楽合唱団などの組織作りも考えられると思ひます。共学共存の学校建設は、このように幅広く、保護者である親たちが積極的に参加しなければならないと思ひます。

「ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会」の活動を私なりの締めくくりを試みました。今年には次に続く「夢目標」を考えてみます。今後とも皆様方のご指導と応援を、何卒宜しくお願ひ申し上げます。



祝

ギバット・ハビバ (ユダヤ・アラブ平和教育センター) 設立60周年

イスラエル国内ではギバット・ハビバとして知られているギバット・ハビバ — ユダヤ・アラブ平和教育センターが、09年11月設立60周年を迎えました。この機関はキブツ運動の左翼に属するキブツ・ハアルツィ連合によって維持されていて 設立以来今日まで、イスラエルのユダヤ・アラブ共存運動の源の役割を担っています。11月19日には、国内や海外の支持者の参加をえて盛大な記念式典が開催されました。詳細は次号に掲載する予定です。

謹賀新年

編集後記

* 「ケレン・ハオール」の機関紙を定期刊行するにあたり、文章を書くプロではない私たちは、読者の皆さまからの親切なアドバイスや応援の言葉を頂きながら、仕事を続けてまいりました。

正直申し上げますと、私のような“文章の素人”が記事を書きますと、読者の皆様に真意を正確に伝えられないことが起きるかもしれません。私たちは機関紙の校正を、読者である佐山さん、田村さんをお願いしております。お二人のおかげで読みやすく判りやすい文章がお届けできていると確信しています。

このように、縁の下の力持ちの方々のおかげで、チームワークも充実してきました。喜んでいきます。私はチームワークのありがたさを強く感じています。関係者を代表して、佐山、田村両氏に私たちの感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

今年の最後の話題は、何と申しましても、暮も近づく12月になって、嬉しいニュースが飛び込んできたことです。それは、京都・一燈園の小学生有志の皆さんが、寒さの中でユダヤ・アラブの子どもたちのために街頭募金をして、支援金を集めイスラエルへ送ってくださったことです。こんなに嬉しく驚いたニュースは、久しぶりのことでした。小学生の皆さんの心意気に感謝いたします。どうもありがとうございます。（山崎智昭）

* 私の友人が下記のような新聞記事の切り抜きを送ってくれました。

「用心を欠かさない「世界の常識」、贈り物にも監視は必要 - 曾野綾子

1月初めの報道によれば、日本はパレスチナに9億円の人道支援を決定した。

日本人は、日本がパレスチナに出す金は、公正な人道上の行為だと相手も理解してくれるだろう、などと思う。困難な時に贈られる援助の金品は、同じパレスチナ人なのだから、確実に困っている人に廻るだろう、と思う。しかしそうでもないだろうと用心するのが当然だ。金品を着服しようとする人も、その金でつまりは武器を買おうとする人もいるだろう。贈り物にも適当な監視が必要だというのは、世界の常識だ。

（産経新聞、生活欄 09年1月19日より抜粋）

私たちは紛争の当地に住んでいますので、パレスチナ側のニュースを耳にする機会が多いです。私は曾野綾子さんのいうことがよく分かり彼女の意見に100%賛同します。日伊支援会は、日本から送られた寄付金の管理には、当然、最善の注意を払います。（松村）

NPO, ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会の目的

私達日本人とユダヤ人は、20世紀に人類史上前例のない最悪の惨事、広島と長崎への原爆投下とユダヤ人大量虐殺を経験した。私達は、ノー・モア・広島、長崎、ノー・モア・ホロコーストを叫び、核兵器や戦争、そして大量虐殺のない真の世界平和と民族の共存共生を希求する。

本支援会は、上記の考えに基づいて、イスラエルにおけるユダヤ人とアラブ人青少年の共同教育推進のために、内外に向けて献金依頼活動を行う。そして、イスラエル国内における二民族の青少年共学共存を推進する団体・組織や施設の共学共存教育活動を支援する。本会の機関誌「ケレン・ハオール」を通し、広く協力を求める。

ご支援金送り先

* 読者の提案により、郵便為替口座を設けました。番号は：**ISRAEL POST 21832292**
宜しく願いいたします。

* 小切手の場合は：

Mitsuko Matsumura; Kibbutz Dalia, 19239 Israel, または
Toshiaki Yamazaki; Kibbutz Gibat HaShirosha, 48800 Israel

* 銀行送金の場合は、山崎、松村にお問い合わせ下さい。

* その他のお問い合わせ先 (E-mail Addresses) :

Mitsuko Matsumura; mitsuko1941@gmail.com (新しいメール住所です)
Aki Yamazaki; yamazaki@netvision.net.il

ケレン・ハオール、第5号

(ケレン・ハオールはヘブライ語で暗闇の中へ差し込む「一すじの光」。希望を意味する)

発行所：ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会
Mitsuko Matsumura, Kibbutz Dalia, 19239, Israel

発行日：2010年1月10日

編集：松村光子、山崎智昭、山崎エステル、中島ヤスミン

校正：佐山宏子(成田)、田村徳章(東京)

題字デザイン：Ms. Danit Rot